

6・恩師の優しさ (2005.3)

昨年の秋、久しぶりに帰った故郷の古い本箱から中学時代に使った英語の教科書 (Jack and Betty) を発見した。横浜に持ち帰り数ヶ月経ったある日、ふと思いで出し約五十年ぶりにページをめくってみると、単語にはカタカナで発音を書いてあり、余白にはいろいろのメモが書いてある、多分先生が授業で話したことの走り書きだと思う。

しばらくメモを見ている内に中学時代の先生の顔が浮かんできた。思春期の中学時代、両親と学校の先生はあたかも相撲の両横綱のような存在であった。偉い人、勉強を教えてくれる人、まだ我がまま盛りのガキを導いてくれる人というように存在感が実が大きかったように思い出される。三、四年前の同窓会でお会いしたが、その後ご無沙汰してしまった。少し唐突だったが以前自費出版した本を同封し昔の教え子の近況報告を兼ねて手紙を書いたところ、早速先生から書評を添えての素晴らしい毛筆の長い手紙を拝受して感激してしまった。

手紙によると先生の本好きは友達間でも有名らしく、三日にあげず必ず何処に寄らなくても本屋には顔を出すらしい「彼が家に居ない時は本屋を探せ」と皆に言われているそうであるが、本離れの時代と言われる昨今にあって、なんともいえない素晴らしい響きに聞こえ感動さえ覚えてしまう。また、私も両親が居ない年代になってしまったが昔の恩師に「深酒をつつしみ、体を大事にせよ」との毛筆の言葉は大変ありがたく身にしみた。

手紙が届いた翌日、今度は百年以上の老舗の新酒が発売されたので是非賞味してくださいと宅急便が届いた。コバルトブルーの綺麗なビンの薄にがり酒は子供の頃に家族というりを囲んで味わったことを懐かしく思わせてくれた。深酒を戒めながらも一本贈ってくれる先生の優しさ日本人のこころ、文化に触れた感じがし幸せな気持ちになった。先生は七十七歳の喜寿を迎えたそうであるが、いつまでもお元気で居て欲しいと心から思う。

7・夢の実現に向けて (2005.3)

五十二歳の頃だったと思うが、ある地方の営業所に出張した時のことである。昼間の業務も無事済んで充実感に満ちた夕刻を迎えた。所長が前もって準備してくれていたらしく、山の麓の閑静な落ち着いた雰囲気のお店で松茸の懐石料理をご馳走になり、いろいろな松茸料理と旬の食材を生かした品々の美味しさに感動した。

徳利の本数が増えるとともに、仕事の話からゴルフの話、所長の若い頃の話と話題が移り、ついに将来の夢の話になった。二、三年後に定年を迎える所長は若い頃から釣りや海に潜ることが趣味だったらしく、定年後のために沖縄方面の海

の近くに安価な土地をすでに購入しているとのことで、あと二、三年あるが定年が待ち遠しくて仕方がないとこにこしていた。

私はこの時、人生は仕事だけではないと夢の実現について語る人を前にし、そのすてきさに魅せられ自分の将来も是非こう在りたいと思ったものだった。

いざ自分があと一年を残す年に直面した時、数箇所から仕事の誘いがあったが、仕事を続けるべきか止めるべきかでやはり相当混迷の毎日であった。やはりいざとなると仕事、組織に関わっている安心感みたいなものを捨て切れない気持ちに惑わされたためと思う。

何人かの先輩の職場を訪問し話を聞いた後に、若い頃会った営業所長の話を思い出しこれからは「余りがんばらない」をキーワードにし、今まで余り出来なかったことにチャレンジしていく結論を出した。

つい先日の新聞に次のような記事があり、少し衝撃を感じてしまった。

フランスのある保険会社が欧米やアジアの十五カ国で、退職について調査をした結果、日本における現役の人たちの退職希望年齢は六十一歳で一番高く、七十パーセントの人が六十歳を過ぎても仕事を続けたいと思っているらしい。

シンガポールは五十四歳と日本と七年も差があるとのこと。六十歳を超えても働きたいのは日本だけだったとのことである、どうやら理由の一つとして昨今話題になっている年金問題があるらしい。

日本では年金額に満足している人は十パーセントと一番低く、オランダでは六十八パーセントと随分差がある。

リタイア後の計画でも、欧米は旅行、スポーツ、ボランティアが多いが日本では具体的計画のない人が多かったそうである。経済大国の国民の一人として少し寂しくなったが、あの所長のことを懐かしく思い出してしまった。

8・地球を大切に (2005.3)

洋画キチだった私もビデオ、DVDで観られるようになってからはめったに映画館に行かなくなったが、先日家内と久しぶりに「ザデイ アフタートモロー」を観た。地球温暖化により将来現実となりうる地球規模の大災害、物凄い破壊力、防ぐことの出来ない自然災害のあとに地球が再び氷河期になると言う物語であるが、昨年十二月のインド洋地震津波の悲惨な光景と重なった。

今年の二月によく京都議定書が発効され、日本でも温暖化防止のために温室効果ガス(二酸化炭素)の排出量を大量に削減しなければならぬと言う厳しい国際公約をすることになる。厳しいことだが地球人の義務であり良いことだと思う。

一月の新聞記事に次のようなものがあつた。

「松下電器は十年度までに子会社も含めたグループで所有する約一万四千台の車をハイブリッド車のような環境に優しい低公害車に置き換えることを決定した。国内の社員約四十万人にも「エコカー」に切り替えてもらうために低金利の社内融資制度も検討することである」

これは大幅な経営コスト増になるであろうがぜひ多くの企業に広まって欲しいものだと思う。

松下幸之助氏の「一日一話」には「企業は社会の公器」と言うことで次のように書いてある。

一般に、企業の目的は利益の追求と言われる。確かに利益は健全な企業経営を行うために欠かすことは出来ない。しかし、究極の目的は事業を通じて社会に貢献、共同生活の向上を図ることであり、その使命を遂行するために適正利益が大切になってくる。

その意味で、事業経営は公事であり、企業は社会の公器である。どんな会社でも常に共同生活にプラスになるかマイナスかの観点で考え、判断しなければならぬ。

「ザデイ アフター tomorrow」に現実味を感じるこの頃、地球的規模で全人類が取り組む必要があると切実に感じる。イデオロギー、宗教等が原因で諍いをやっている時間は地球上にもしかして余り残されていないのかもしれない……と思ったりする。

9・大先輩のいい話 (2005.4)

横浜に住んで四十六年、半世紀にならんとしている。以前から千鳥が淵の桜を一度観に行きたいと思っていたが、昨年は予定した日に大雨となり中止、そうこうしている内にシーズンが過ぎてしまった。毎年桜の季節は雨、風、寒などに邪魔されてチャンスが逃がし、また来年があると気楽に見逃してしまう。今年は絶対に行く決心していたが、やはり予定日は物凄い大風で中止。でも今年の決意の程は例年と違っていた、翌日天候を見計らって決行。

物凄い人込みでビックリ仰天、千鳥が淵を後回しにし靖国神社を散策、こちらも相当の人込みで、桜の木の下が青くなっている？ 宴会用のシートが所狭しと敷き詰められているのだ。初めての靖国神社、遊就館ものぞいてみると、玄関ホールに零式艦上戦闘機ゼロ戦、榴弾砲、タイ、マレー、ビルマで物資補給に活躍したという蒸気機関車などが展示されており興味津々。

それにしても正直なところ、こんな小さなゼロ戦で戦場に発ったのかと当時のことを想像しゾツとした。

ゼロ戦を見て二十代前半の頃聞いたある人の話を思い出した。その人は頭がびかぴかの貫禄充分といった人で戦争中は最初海軍で船を設計していたが、後に飛行機の設計に変わりゼロ戦などいろいろ設計した経験豊富な人。

うる覚えだが大体次のような話で、当時技術者の卵であった私は大きな感銘を

受けた。

●ある魚釣りの大好きな人が釣り友達とある魚を釣る競争をした。その魚は網では獲れるが、絶対と言ってよいほど釣れない魚である。彼はいつも頭の中で考えていた、そしてある日考え付いた。釣れるという事はどういう事か、其れは魚が針を口の中に入れることである、それには魚の大好きな食べ物を餌にしなければいけない。すなはち魚の身になってみた訳である、その結果彼は店に行き網で取った魚を買って来て、ある大学の研究所に持って行き解剖し、その腹の中を分析してもらった。そして彼はその魚の食べ物(好物)を突き止め、それ以来釣れるようになったとのこと、しかし彼の釣り友達はいまだに釣れないそうである。

●ある深海に住む魚を釣りたいのであるが、餌が深海に届く間に浅海の魚に餌を取られてしまい、なかなか釣れないで困っていると言うある漁師、そこでどうしたかという、浅海の魚を調べその魚が一番好きな餌をいっぱい持って行きどんどん釣る。さて浅海の魚が釣れなくなった時、深海の魚の糸を垂れる、そうすると何といっぱい釣れたという話。

●彼は最初船を設計していたが飛行機の方に回された。その時彼は上役に「せっかく船をやるうと思つて勉強もし、経験も幾らか積んで来たのに今更飛行機とは何ですか」と言つたらしい。上役曰く「何を言うか三十にもならぬ者が自分の仕事を決定できるはずがあるか」と……彼はその後しばらくして飛行機の設計に取りかかったが、今になって考えて見るに飛行機の設計に船の設計の勉強、経験が大変参考になり、なるほどと思われるということである。すなはち会社の社員、上司、重役の間で異動が何か島流しの如く考えられる傾向があるが、考えるにいろいろの所を回つて経験豊富になることは、入社以来異動なしにそこに居た人に比較して大変知識、経験が豊富になる。従つて異動もまた良し、いろいろの経験が必要だという話。

●彼は当時技術者として活躍しているときに、友達と技術者の勉強とはどのように定義したら良いかと言うテーマで議論した。その結論としては、いかに自分の専門以外のことに興味を持ち勉強するかという事になったらしい、つまり電氣屋が電氣の会社を見学してもどうせ似たり寄つたりの事しかやっていないのだから余り得る事がないだろう。しかし他の種類の会社を見学したら色々珍しい事、勉強になることがたくさんある、自分の専門以外のことにいかに興味を持ち勉強の幅を拡げることが技術者には必要。初めての靖国神社、千鳥が淵の桜見物で、すっかり忘れていた昔の記憶が蘇つた、諸先輩の話に素直に耳を傾けては職場の上司同僚と一緒に開発設計に勤しんだ頃を懐かしく思い出す。

10・水の流れのように (2005.6)

ゴールデンウィークの五月五日、親戚の結婚披露宴でこの時期久しぶりに故郷に行った。

関東では桜が終わっていたが、残雪と若葉と桜、花達の大合唱がある雪国の春は、過去に何度も感激させられたものだ。例年桜は四月下旬であるが今年は大雪だったため桜が少し遅かったらしい、しかし流石に平地では桜はほぼ終わり少し落胆。披露宴は貸し切りバスで約一時間ほどの国道十七号線沿いにあるスキー場のあるホテル、ここまで来るとまさに残雪と桜、若葉、真っ青な空の合唱で心を洗われる思いであった。

散策の途中に細い水路があり雪解け水がごうごうと流れていた。水が流れる時、水路にいろいろの出っ張りがあると水はそれにぶつかり渦を発生し、波立ち泡立ち、水全体がごうごうと音を立てて激しく流れる、まさにその情景であった。

しばらく行くと同じ水路であるが大量の水が水路いっぱいになり、高速なのに音もなく、まるで動いていないような錯覚を与えるように流れていた。一体どうしたことか、答えは簡単、障害物がないのである。職場や家庭の整理整頓などはまさに障害物を取り除いて滑らかな水路を作り、能率、安全は勿論であるが日常の精神的情緒の乱流を取り除くことだと思う。

水路と違い外交の世界では全ての障害物を取り除くことはそう簡単ではないと思う。しかし素直に道理を見つめ、将来を見つめた時に、割合 簡単に滑らかな水路を作ることとは可能だと思う。

取り除ける障害物は早く無くし、大量の水を滑らかに流して欲しいと願わずにいられない昨今である。

